

神奈川県立歴史博物館蔵「近海見分図」について

—幕末の海防と実景表現—

鶴*
岡 明 美

はじめに

「近海見分図」は、嘉永三年（一八五〇）幕命による豆相・房総の沿海巡視を契機として制作された画冊である。「巖之巻」「鳳之巻」「亀之巻」「龍之巻」と各々題された全四冊にわたって途次の景観を描く図が収められており、その総数は一〇七図にのぼる。当時老中筆頭（執政）海防掛であった阿部伊勢守正弘の蔵書印を有し、同家に傳來したものであるが、現在は神奈川県立歴史博物館の所蔵となっている。

本作品についての単独論文としては、旧蔵者で阿部正弘の曾孫に当たる阿部正道氏の「近海見分図」について「幕末の江戸近海の海防」(『三浦古文化』五号、昭和四四年)がある。同氏はこの論文において、本作品に歴史史料としての観点から検討を加えている。すなわち本図の詳しいデータの提示、また本図の成立契機となった巡視の記録、『近海御備向御用留』(以下『御用留』と略称、国立公文書館蔵¹⁾)等の史料との突合せによる、巡視の足取りの明確化、さらに当時の対外状況から見た、本巡視の直接的動機の推定がこの論において果されているのである。その後本作品は、幕末の海防史をテーマとする展覧会において、ペリー来航直前の状況を伝える史料として展示されてきた²⁾。

このように本作品は、幕末海防史の一樣相を伝える貴重な史料であるが、それと同時に絵画史においても検討すべき点を有している。すなわち、幕府による巡視を契機とする実景図作品は、寛政五年（一七九三）、松平定信率いる江戸湾巡見に基づく谷文晁「公余探勝図」を端緒に、幾つもの作例が確認されている。「近海見分図」もこれらと同系列の作例と見なすことができるからである。とはいえ本作品のこのような位置付けに対する言及はおろか、実景表現そのものに注目し、絵画的検討を加えた研究自体、これまでのところ皆無であると言ってよい。そこで本小論においては、おもに「公余探勝図」との比較検討から「近海見分図」の実景表現の特質を明らかにするとともに、そうした特質が生み出された要因について、当時の海防の状況などを踏まえつつ考察していくことにしたい。なお、本小論において使用する括弧は、『

を書籍名(名所図会を含む)、「」を作品名、論文名、巻の名称、その他一般の固有名称、「」を図および挿図の表題、《》は原文からの引用とする。

第一章 作品の概要

(一) 巡視の目的と経路

「近海見分図」成立の契機となった、豆相・房総に及ぶ巡視は、嘉永三年（一八五〇）五月から七月にかけて実施された。主要なメンバーは、前掲『御用留』第一冊冒頭部分に記されたとおり、同年二月二十九日に任命された勘定奉行石河土佐守政平、目付本多隼人助安英、同戸川中務少輔、鉄砲方井上左太夫正路、同田付主計に、遅れて三月六日に任命された西丸留守居役筒井紀伊守政憲、勘定吟味役佐々木循輔を加えたものであった。

「近海見分図」によって明らかにされた巡視の経路は、既に前掲阿部氏の論文において示されているので、詳細はそちらに譲り、ここでは作品全体の流れの紹介も兼ねて、一同の足取りについて粗述を試みたい。まず「巖之巻」(第一冊)冒頭に「東海道品川駅(図1)とあるように、一行は五月十三日に当駅を発し、本牧(現神奈川県横浜市)、金沢八景(同)を経て猿島(現横須賀市)、旗山(同)、十石崎砲台(同)を見学する。浦賀港(同)の見分から「鳳之巻」(第二冊)に入り、平根山、千代崎等の砲台を見分しつつ、三浦半島の海岸沿いを一周して東海道を西へ進み、伊豆半島の東海岸を南下して下田(現静岡県下田市)に至る。「亀之巻」(第三冊)は下田周辺の景から始まり、その後は内陸部を北上して天城峠を越え、浦賀港に戻ってそこから船を用いて房総半島の竹岡(現千葉県富津市)に上陸、そのまま半島を南下して鋸山(現富津市と鋸南町の境)を越え、大房崎(現富浦町)を経て鏡浦(現館山市)に至る。

〔キーワード〕 江戸後期絵画／実景表現／「近海見分図」／幕末期海防政策／名所図会

*平成一四年度生 比較社会文化学専攻

最終冊に当たる「龍之巻」は、洲之崎砲台（同）における大砲の試し打ちの情景から始まっている。この洲之崎見分を終えると一行は鴨川（現鴨川市）まで浦伝いに進み、そこから内陸部に入り、木根峠（現君津市）を越えて富津（現富津市）に到着、当地を見分の後北上し、木更津、船橋を通過、両国に戻ったことが、最終図「江戸両国橋之図」（図2）からも明らかである。前掲『御用留』の記録によると、見分の終了は七月六日のことで、七日には帰府していたことが窺える。⁴

この巡視の目的は、前掲阿部氏論文に詳述されている。⁵ それに基づき略述すると、日本近海における怪しい外国船の出没という非常事態への備えとして、將軍の居城がある江戸近海の警備を一層確かなものとするにであった。ちなみに巡視が行われた嘉永三年に最も近い過去における外国船の来航は、弘化三年（一八四六）、合衆国司令長官海軍少将ピットルの、軍艦コロンプス号他一隻を率いての浦賀入港であった。前掲阿部氏の論文には、この来航に刺激されて嘉永三年の近海見分が行われたとの見解が示されている。⁶

（二）制作者についての考察

本作品には序文、跋文、絵師の落款等、制作に関わった人物や経緯を示す情報が何ひとつ記されていない。そこで、前掲『御用留』や画中の表現に着目し、本作品の制作に関わった人物についての推定を試みたい。

制作者の問題を考える上で、まずこの見分に絵師が随行した可能性について検討を試みたい。そもそもこうした巡見・巡視の際、実景を描かせることを主目的として正式に絵師をメンバーに加えた例は存在するのであろうか。絵に関わる役目を前面に押し出しているのは、文晁の弟谷元且が寛政十一年の蝦夷紀行に参加した際、本草学者渋江長伯の下で絵図面取りの役目であった例のみである。「公余探勝図」における文晁は、松平定信の出身である田安家からの家来という身分で参加していたことが下田における泊付の記録によつて知られる。⁸ 幕末に文晁の女婿、目賀田守蔭が蝦夷地踏査に赴いた際は、幕臣であり、かつ踏査を推進していた国学者、前田夏蔭の弟子としての参加であったと考えられている。⁹ 一方幕末の小笠原島探検において医業の傍ら絵図面の清書ができる人材としてメンバーに加えられたのは、大垣藩医であり、絵図調所出役として西洋画法を学んでいた宮本元道であった。¹⁰ こうした諸例は、巡見に際して絵の心得ある者を随行する場合、例えば欧米において遠征に画家を伴うような形をとることはなく、他の業務と兼任する場合は多かったことを物語っている。專業の絵

師を雇う経済的余裕がなかったためでもあろうが、これには機密保持の意味も加わっていたであろう。また、絵に関わる任務が命ぜられても、それは動植物写生や絵図面作成であり、実景図制作はそれらの業務を果した上で成された副業の成果であった。次に、嘉永三年の見分の記録中、絵とその周辺に関連する記事を拾ってみた。『御用留』には絵師の随行に関する記述は一切認められない。ただし、第一冊所収の、四月に鉄砲方井上左太夫、多付主計連名で残りのメンバー宛に差し出された書状に「場所江絵図引候もの召連候様いたし度（後略）」とあり、地図制作者の随行を求める意見が出されている。これに対する翌月二十一日の回答は、「別段絵図面引申もの召連不申（後略）」というものであり、地図制作者は随行しない旨を告げている。また、

絵図面仕立、すなわち絵図面の清書に關しても、《絵図面仕立候儀ハ吟味方下役御普請役之内にて為引立御同様（中略）為引立不申（後略）」と、こちらも随行しない旨回答しているのである。この書状のやりとりから、巡視には絵師は勿論のこと、地図制作者も随行しなかつた模様である。

このように絵師はおろか、絵図制作者や清書者すらも連れて行かなかつたと見られる巡視の状況から、制作者の個人名を特定するのは現段階では不可能であろう。そこで、この「近海見分図」が、メンバーのうちだれの命により制作されたかという問題について推測すべく、手がかりを画中に探していきたい。

ここで注目すべきは、画中の随所に描かれる、供の者が持つ槍印である。これらは赤色と青色に大別されるが、前者が若干多くの場面で描かれ、冒頭図と最終図に描かれるのも赤色の方である。一方「龍之巻」第三冊所収「南総天羽郡竹岡上岸図」（図3）は房総半島への渡海の場面で、多数の船が帆をはらませて航行する様子が描かれている。このうち最も大きく描かれる船の船尾には青の槍印と勘定奉行石河氏の紋、その直前の船には赤の槍印と筒井氏の紋がそれぞれ見出される。¹¹

こうした諸点から、作中最も顕著に見られる赤い槍印の主は筒井政憲であることが明らかにされる。従つて「近海見分図」も同氏の関与による制作である可能性が最も高いと考えられる。一方本作品中には、青い槍印を従え、床机に腰掛ける、見るからに高位の人物が随所に描かれる。これは勘定奉行石河の姿であると思われる、巡見に参加したメンバーの中で最も地位が高かつた彼への敬意の表れではないだろうか。

筒井政憲（一七七八一—一八五九）は対外危機が迫ると共に老中阿部伊勢守の信任を受けた。『筒井肥前守明細書』（国立公文書館蔵）弘化四年（一八四七）五月二日、「備場筋之儀二付去年以来取調口茂仕彼是骨折付拝領物被仰付（後略）」とあるなど、海

防政策の立案に尽くした政治家であった。地誌にも深い関心を寄せ、先の『筒井肥前守明細書』には『武蔵国風土記之内 御府内之部』を嘉永元年（一八四八）に編集したことが見えている。晩年には前掲の目賀田守蔭が蝦夷の景観を写した「延叙歴検真図」（東京大学総合図書館蔵）に題記を寄せている。こうした点から、「近海見分図」の制作をプロデュースした人物として最も相応しいのが、この筒井であると思われる。

第二章 実景描写の特質についての検討

（一）「公余探勝図」との比較

①実景描写のスタイルについて

次に「近海見分図」の作風について分析を試みたい。その際、先に触れたとおり、谷文晁「公余探勝図」との比較対照を考察の手がかりとする。「公余探勝図」は当該作品より五十年以上前に制作されたものであるが、江戸湾の海防を強化するための巡見という目的が「近海見分図」と一致し、かつ巡見の経路も一部重複している。さらに実景図の系譜の出発点に位置する「公余探勝図」との比較を通じて、実景図の特質が時代の変化によってどのように変質したかを見ることができよう。以上の諸点により、両作品の比較検討は、実景図の展開を考察する上で有効であると考えられる。

「近海見分図」全巻を通じて用いられている構図法には、伝統的な俯瞰図法と西洋からもたらされた透視図法の折衷が見られる。すなわち、「亀之巻」（第三冊）所収、下田港内の島々を描く（其二 和歌浦（図4））を見ると、水平線や地平線の存在は意識しているものの、前景と後景のモチーフの大きさにはそれほど差をつけず、いわゆる平行遠近法によって処理していることが分かる。一方「公余探勝図」の諸図は、完璧ではないものの、西洋の透視図法をより原則に忠実な形で導入している。このことは、前掲「其二 和歌浦」を、ほぼ同じ地点を逆方向から眺めた図である「下田港（図5）」と比較すると一層明らかであろう。

次に描法についての考察に移ろう。「近海見分図」には、構図法同様伝統的な描法への傾斜が著しく認められるが、漢画と大和絵の間で比較するならば、より強く後者の影響を受けていることを見取ることができる。すなわち、漢画の手法と特定し得る図は、「三代金之図」（図6）や「鋸山中腹」といった険しい山岳を描く図に限られて

いる一方で、松やなだらかな山肌の描写といった大和絵風の表現は、全体を通じて見られるものである。とりわけ「鳳之巻」（第二冊）「足柄下郡岩村長坂望初嶼之図」（図7）には、巡見一行の姿を丘の斜面から覗かせるといって、仏画の来迎図や絵巻の常套句的表現が採用されているのである。このことは「公余探勝図」には「長津呂」（図8）を始め、岩石を描く諸図に漢画の技法が顕著に表れるものが数多く存在し、大和絵のそれは「大休峠西望」（図9）の稜線の描法に限られているのと極めて対照的である。

このように、構図、描法の両面において、「公余探勝図」と「近海見分図」との間には大きな相違が存在する。こうした「近海見分図」の実景描写に最も近い特質を有する例を求めるとすれば、江戸中期以来の伝統を持つ名所図会の描写に行き当たると。安永九年（一七八〇）、秋里籬島の『都名所図会』刊行以来、幕末に至るまで夥しい数の名所図会が刊行され、広く流布していた。これらの図会に収められた挿図が、個別の実景表現の典拠として用いられたことについては多くの例が指摘されている。一方これらの挿図は、『新編武蔵風土記』を始めとする官撰地誌の編纂所である、昌平饗内の地誌調所においても、その正確かつ精緻な表現が高い評価を得ていたことが、当該編纂所内における、各地の地誌の収録および目録化の成果である『編輯地誌備用典籍解題』の記述から窺える。しかも実際に、『新編武蔵風土記』挿図の実景表現に影響を与えることすらしたのである。

「見分図」における実景表現がいかに多くを名所図会挿図に負っているかを見るために、二、三の例を掲げたい。例えば前掲「東海道品川駅」（図1）に見られる、賑う宿場を俯瞰視して捉える手法は、『伊勢参宮名所図会』巻一所収「大津八丁札之辻」（図10）を始め、表現の定型として用いられている。また、「吉田新田」（図11）のように画面左端に山、右手に海を臨む構図の一例として『木曾路名所図会』巻一所収「磨針嶺」（図12）を掲げることができよう。さらに、前景に斜めに横切る街道を俯瞰して、その奥に名所を描く「東海道陶綾郡大磯駅」（図13）と同「醒井」（図14）の間に類似が認められる。

とはいえ、名所図会が既に題材とした場所を「近海見分図」が描く場合、図そのものを安易に引用しているわけではない。例えば金沢八景の図について見てみよう。江戸初期に近江八景に倣い、八つの名勝が選ばれて以来、繰り返し絵画化されてきた当地を巡視の一行も訪れ、「巖之巻」（第一冊）所収の「金沢囁目」および「金沢八勝能見堂眺望之図」（図15）を残している。これらは名所図会とは明らかに異なる視点で当地を捉えている。とりわけ後者、能見堂からの眺望図は、向かって右手に能見堂を描

き、左手に八景を望む『東海道名所図会』所収図（図16）や、遠くの視点から八景をすべて捉える『江戸名所図会』所収図いずれとも異なり、接近した視点から複雑な海岸線を描くものである。実景を目前にした成果がこの図に表れているということができよう。

ただし、幕末ともなればこうした複雑な海岸線を描写する表現は、既に名所図会の挿図においても採用されていた。『尾張名所図会』前編卷之六（幡頭寺）（小田切春江画）（図17）はその一例である。従って「近海見分図」の表現がこうした名所図会に見出される実景表現の型を応用した可能性は極めて高いと思われる。その点に、既存の表現パターンが存在しない状況にあつて、その都度実景と向き合う必要があつた「公余探勝図」と、名所図会という定型が既に完成されていた時代の制作である「近海見分図」の相違を見ることが出来る。

② 題材選択の特質

ここまで、「公余探勝図」との比較を主として、「近海見分図」の実景表現の特質について検討を試みた。その結果、実景の形や質感に即して忠実な再現を目指した「公余探勝図」に対し、実景の再現にあたり、名所図会における既存の描写の型の蓄積から適当なものを選び、当てはめる「近海見分図」の特質が明らかになった。しかしながら、両者の相違はこうした個別の描法の側面にとどまらない。巡見した地域は一部重なっているにもかかわらず、作品全体を通じてどのような場所を題材として描くかという点において両者は際立つた相違を示しているのである。

まず、両作品の図を主題別に分けると次のようになる（図18）。これによると、「公余探勝図」において圧倒的に多数を誇るのは、例えば「伊浜東望」あるいは「秋谷浜」といった、海岸を題材とする図である。その構図の大半は、浜の一方の端から海岸線を弓なりの形で捉えて遠景を眺望し、海岸線がどのように繋がって見えるのかを再現するものである。これに続くのが、前掲「下田港」を始めとする港の図、次いで「湯嶋」のような山あいの景観を描く図となる。こうした点から、「公余探勝図」において重視されていたのは「港」も含めた海岸の地形の把握、ランドマークである山の形状の把握であつたという推測が容易に成り立つ。次に、「近海見分図」に目を移そう。依然として海岸線の描写は見られるものの、数は「公余探勝図」と比して非常に少ない。代わって多く描かれているのが、見晴らしの利く場所から海の遙か彼方までを眺望する図である。「公余探勝図」においても「小網代」（図19）を始め四図の例が見られるが、「近海見分図」においては「巖之巻」（第一冊）所収「武州久良岐郡戸部村眺

望図」（図20）のように、小高い山の肩越しに広がる海を、遠景に小さく青くかすむ島とともに描く図を一例として、全巻を通じて計二十五図を数える。

こうした変化を考える際、「公余探勝図」成立の契機となつた寛政五年の巡見から、「近海見分図」が制作された嘉永三年に至る五十七年の間における海防をめぐる状況の変化について、当然考察を及ぼす必要があるであろう。すなわち、江戸湾防備の対策が殆んど白紙の状態であつた寛政五年において、「地形の正確な把握」は急務であつた¹⁸⁾。対象をよく観察し、先入観なしで再現することが可能な西洋画法は、こうした目的に最適と考えられたのであろう。

これに対して、嘉永三年の時点に目を向けると、そこには状況の著しい変化が認められる。文化五年（一八〇八）、イギリス軍艦フェートン号の長崎侵入を直接の契機として、幕府は江戸湾防備体制の確立を推進することになり、文化七年に会津、白川両藩に江戸湾防備を命じ、翌八年には会津藩に城ヶ島安房崎、浦賀平根山、走水観音崎、白河藩には州崎、百首（竹ヶ岡）に夫々台場を築き、兵を駐屯させた。その後警備担当藩の交代など紆余曲折はあつたが、前述弘化三年のビッドル来航を機に防備は強化され、担当藩、砲台の数ともに増加を見せていた。すなわち、決して十分な対処ではなかつたものの、ひとまず敵に対する防衛の体制が取られていた時期であつたのである。そうした状況下にあつて最も重要なのは、敵がどこからどのようにして侵入してくるか、という点であると考えられよう。こうした点を踏まえて「近海見分図」の海を望む諸図に注目するならば、それらがあたかも敵船の侵入を監視するいわば「物見台」の視点を想定して描かれたように見えて来るのである。

しかしながら、このように内陸部から海を望む図が、海防対策を講ずる上で何か具体的な手がかりを与える機能を有しているか、という問題となると甚だ疑問を覚えざるを得ない。敵の上陸に備えて何らかの対策を講ずる一助とするための図であれば、海側から浜を望むアングルによる図、すなわち敵の視点を再現した図を採用すべきであろう。では、これらの図は単に景観美を表現するために描かれたものなのであろうか。勿論そうした面も全く否定し去るわけにはいかないが、「近海見分図」というタイトルの下、最多の図数を誇る「海を望む諸図」には、やはり何らかの意図があると見たい。それでは、その意図とは何であるかとなれば、具体的、実用的なものではなく、「敵を迎え撃つ」という心境を常に心に養うべし、という自戒の念を画面に表明すること考えざるを得ない。何ら具体的な施策を生むものではないが、「警戒せよ」というメッセージを提示することが、これらの図の目的であるように思われる。

(二) 新しい主題—砲台

似たような問題は、砲台を描く諸図にも現れている。海防体制の変化に伴い、「公余探勝図」の時代には思いもよらない場所が主題に加えられることになった。それが砲台である。海防の強化に伴い、三浦半島と房総半島の各所に砲台が築かれていたことについては前述した。嘉永三年見分の当時は、川越藩、忍藩、彦根藩、会津藩の手伝による江戸湾防備体制ができていたが、見分の主要な目的の一つとして、これらの砲台の視察があったのである。こうした状況についても「簗山砲台試大煩図」(図21)が、切り立った崖の下に築かれた砲台において、すさまじい煙とともに打ち上げられた大砲を描くのを始め、数図に示されている。

しかしながらこれらの図は、必ずしも各砲台の実況を正確に記録すること自体を目的にはしていない。その理由として第一に、本図には視察した全ての砲台が描かれているわけではないことが掲げられる。すなわち、『御用留』第三冊所収復命書の、三浦半島における川越藩の持ち場に関する記述において、簗山、十石崎、観音崎の三箇所は「咽喉之地を唱候要所二有之」とされているが、これらのうち観音崎については、陣営の様子は描くものの、砲台の姿は見られない。また彦根藩井伊家持場の砲台についても、千駄崎(現神奈川県三浦市)および松輪(同、記録中にある剣崎のことと考えられる)の砲台訓練の様子を描き、「鎌倉郡七里浜」には八王子山遠見番所の所在が示されているものの、他の砲台(大浦山、安房崎、長津村、荒崎)についての図は見られない。また砲術訓練についても「御用留」第三冊、砲術訓練についての報告に記されるとおり、五月十五日には猿島、十石崎、観音崎において実施されていたにもかかわらず、前二者は図中に見えていない。五月二十六日の千代崎、六月二十二日の竹ヶ岡、同二十四日の大房崎も描かれていない。

砲台の数についても既に前掲阿部氏の論文に指摘されているように、正確な描写が最優先されているわけではない。簗山の図の場合は、試射の煙のため六挺目が隠れており、「十石崎」においても五門あるはずの砲台が三門しか描かれておらず、二門は絵の端となっている⁽²¹⁾。

こうした諸例は、「近海見分図」における実景の表現が正確な情報の視覚的伝達手段としての役割を必ずしも果たしていないことを物語っている。とはいえ現実にはない絵空事の世界を描いているわけでは勿論なく、景観美のみに関心を傾けているものでもない。あくまでも近海の巡視という現実のイベントを記録する姿勢に基づくものの、その目的の方向性が情報を蓄積することに向かっていないのである。

江戸湾における視覚データの表示法としては、弘化年間成立の「江戸諸砲台之図繪卷」(船橋西図書館)(図22)に見るような絵図面の手法が既に確立しており、こちらの方がより明確に砲台の状況を説明しているといえよう。従って「近海見分図」の実景表現には別の目的が期待されていたと考えられる。それはすなわち、先程の「海を望む」諸図においては「海からの敵に油断すべからず」というメッセージの表出であり、砲台図の存在は、もはや海防政策の中心が砲台の備え自体にあることを示し、演習の活況を呈する様子を描くことで、備えが万全であるという安心感を人々に抱かせることを意図して描かれたのではないだろうか。例えば房総に遊んだ克庵なる人物の著書、『南遊紀行』(嘉永六年刊)において、彼は洲崎を見学して「危礁峭削、可謂要害之地」と評したが、「近海見分図」においては画像の力でこうした印象を喚起することを試みたのではないかと考えられるのである。

おわりに

以上、「近海見分図」の絵画的検討の第一段階として、「公余探勝図」および名所図会との比較を中心に作風の検討を行い、題材選択の特質について、当時の海防政策との関連にもつき考察を試みた。今回の小論においては全体的傾向を捉えるにとどまったが、今後の課題としては全一〇七図を数える各図の内容についての仔細な吟味が残されている。

その際考察の焦点となるのは、「近海見分図」における人物表現の取り扱いである。「公余探勝図」は、巡見で訪れた村落の住民が暮らす様子を全くといってよいほど描かず、巡見の一行を豆粒状に描きこむのみであり、この作品以来、そこに住む人々の生活の様子については実景図描写から除外されるのが通例であった。幕末に至り、文久期小笠原島探検を契機として「小笠原島真景図」が制作されたが、ここに探検一行や原住民の様子が描かれているのが唯一の例外であった⁽²²⁾。

ところが「近海見分図」においては、「豆州加茂郡伊豆山権現」中の、神社の前で思い思いにくつろぐ一行の姿を始め、巡視の一行の様子が生き生きと示されるのみならず、「白子村砲台」に描かれる塩作りの様子、「平砂浦蟹婦漁石決明図」のあわび採りをする海女(図23)、「其二 漁網図」では浜名太村で漁網を引く男達といった、その地域で労働し生活する人々の姿が捉えられているのである。この点は「近海見分図」のまさに画期的な特質であると言えよう。こうした人々の描写を実景図が含むに至つ

た経緯について、考察を試みる必要があると思われる。

現段階においては、これもやはり名所図会との関わりの中で考察することで新たな展望が開ける可能性がある。旅行者や土地の人々の風俗は名所図会に頻繁に紹介されており、中には『尾張名所図会』所収「潮湯治」(図24)のように公然と裸体の群像を表現するものもあつたからである。とはいえこうした表現を即、実景図へ無批判に導入したと考えるのは余りに早計であろう。そこには実景を捉える上での意識の変化が生じた可能性が存在していると思われる。こうした変化を促した要因を、当時の海防思想および政治思想の中に探ることは可能であろうか。この点については今後の検討に期することとする。

いずれにせよ、激動の時代を目前にして実景を描く作例に生じた変化の特質を突き止めることは、未だ不明の点が多い幕末の絵画史の様相を明らかにすることにも繋がっていくであろう。こうした点も視野に入れつつ、さらに研究を進めて行くこととしたい。

註

- (1) 『近海御備向御用留』(旧内閣文庫)は全五冊。各冊の内容は第一、二冊は巡視に関わる諸記録、第三冊は巡視後の報告書、第四冊は「砲術訓練之部」第五冊は「大森村町打場 御用留」である。
- (2) 「ペリー来航前後の江戸湾の海防」(横浜マリタイムミュージアム、平成十四年)「特別展 黒船」(神奈川県立歴史博物館、平成十五年)。
- (3) 実景に基づく作品群については、筆者学位論文「江戸後期実景表現に関する史的考察」(お茶の水女子大学提出、平成十七年) 参照。
- (4) 『御用留』第二冊所収の文書に朱字にて「戊七月七日帰府之上鈴木三平より差越候二付返書無之事」との書き込みがなされている。
- (5) 阿部正道「近海見分之図」について―幕末の江戸近海の海防―(一〇七〜一〇八頁参照)。
- (6) 同右論文二二五頁。
- (7) 福井淳人「谷元旦―その伝記的記述と画業」(大塚和義監修『蝦夷風俗図式』「蝦夷器具図式」復刻版)安達美術、平成三年) 所収、七二頁。
- (8) 『下田年中行事』所収、定信一行の下田逗留に関する記事のうち三月二三日の項には一行の宿泊先が記されているが、文晁の肩書きは水野佐内とともに「田安様より御付」とされている。(引

用は森義男復刻『下田年中行事』長倉書店)に拠った。

- (9) 目賀田守蔭の蝦夷探検参加の経緯については、「目賀田守蔭筆『蝦夷歴検真図』について―文晁派実景図の系譜―」(『人間文化論叢』七、平成十七年) 参照。
- (10) 小笠原島探検に参加した服部婦一「南島航海日記」(『小笠原島記事拾遺』所収、国立公文書館蔵) 卷之一に参加メンバーの名簿が記されるが、宮本元道の肩書きは「戸田采女丞家来 絵図引」とある。
- (11) 紋の同定は、深井雅海、藤實久美子編『江戸幕府役職武鑑集大成 第二十九卷(弘化五年―嘉永三年)』(東洋書林、平成十年) 所収「嘉永武鑑」(嘉永三年刊)に拠った。
- (12) 筒井政憲の事蹟については、『国史大辞典 第九卷』(吉川弘文館、昭和六十三年) 同氏の項参照。
- (13) 拙稿「目賀田守蔭筆『蝦夷歴検真図』について―文晁派実景図の系譜―」一一二頁。
- (14) 阿部氏論文中においても、阿部正弘に筒井政憲が呈出したとの見解が示されている。なお、首尾と末尾が空白のまま残された本作品の状態から、阿部に序文あるいは跋文の起草を依頼したものの、その後の時勢の変化でそのまま手元に残った可能性があると思われる。
- (15) 大久保純一「広重に見る江戸名所絵の定型」(『美術史』一四五号平成十年)には、歌川広重の江戸名所絵に『江戸名所図会』の図柄が転用された例が幾つか掲げられている。
- (16) 『編脩地誌備用典籍解題』に表れた、名所図会に対する評価については拙論「国立公文書館蔵『新編武蔵風土記』挿図についての考察―江戸後期官撰地誌における実景表現の一例―」(『人間文化論叢』第八卷、平成十八年) 一一三頁参照。
- (17) 『新編武蔵風土記』への名所図会の影響については右論文参照。
- (18) 寛政期、松平定信の海防政策については、筑紫敏夫「寛政改革における幕府の房総廻村について」(『千葉県立中央博物館研究報告 人文科学』五(一)、平成九年) 参照。
- (19) 原剛「幕末海防史の研究」(名著出版、昭和六三年)、五〜一六頁。
- (20) 佐藤隆一「江戸湾備場における火砲類配備の状況」(『三浦古文化』四六号、平成元年) 三九頁。
- (21) 前掲阿部氏論文、一一四頁。
- (22) 『改訂房総叢書 第四輯 地誌(二)日記 紀行』(改訂房総叢書刊行会、昭和三四年) 一〇八頁。
- (23) 「小笠原島真景図」については拙論「小笠原島真景図」をめぐって―実景表現に反映された幕末維新时期小笠原島政策の「様相」―(『人間文化論叢』第六卷、平成十六年) 参照。

【図版出典】

- 図5・8・9・19 『江戸名作画帖全集Ⅲ 文人画』(3) 文晁・峯山・椿山(駿々堂出版、平成五年)
- 図10 『版本地誌大系 一六 伊勢参宮名所図会』(臨川書店)

- 図12・14 『版本地誌大系 六 木曾路名所図会』(臨川書店)
図17・24 『版本地誌大系 七 尾張名所図会』(臨川書店)
図22 「ペリー来航前後の江戸湾の海防」展図録(横浜マリタイムミュージアム、平成十四年)

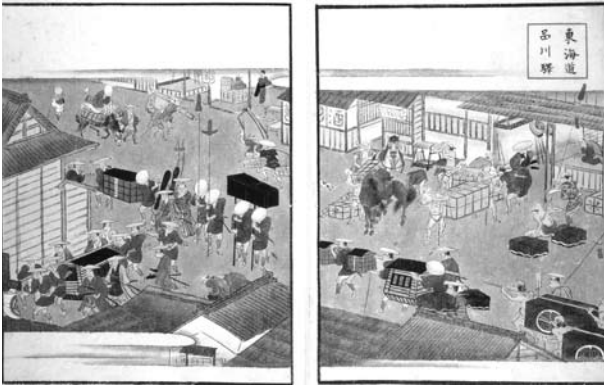


図1 「近海見分図」より〔東海道品川驛〕
神奈川県立歴史博物館蔵

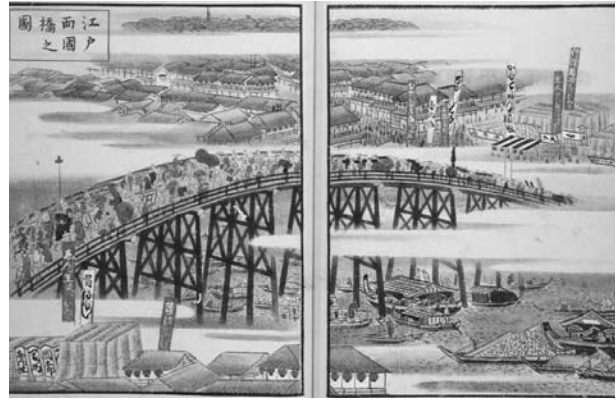


図2 「近海見分図」より〔江戸兩國橋之図〕

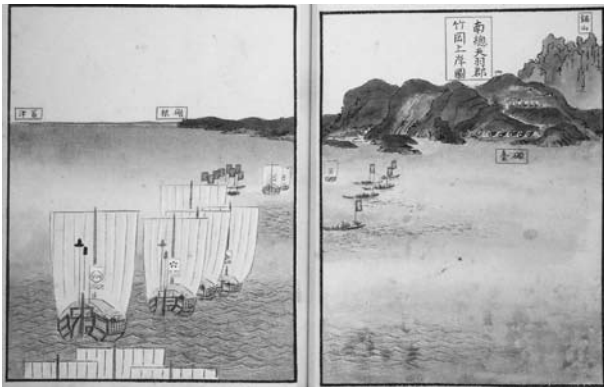


図3 「近海見分図」より〔南総天羽郡竹岡上岸圖〕



図4 「近海見分図」より〔其二 和歌浦〕



図5 谷文晁「公余探勝図」より〔下田港〕
東京国立博物館蔵



図6 「近海見分図」より〔三代金之圖〕



図7 「近海見分図」より〔足柄下郡岩村長坂望初嶋圖〕



図8 「公余探勝図」より〔長津呂一〕



図9 「公余探勝図」より〔大休峠西望〕



図10 『伊勢参宮名所図会』
卷一所収〔大津八丁札之辻〕



図11 「近海見分図」より〔吉田新田〕

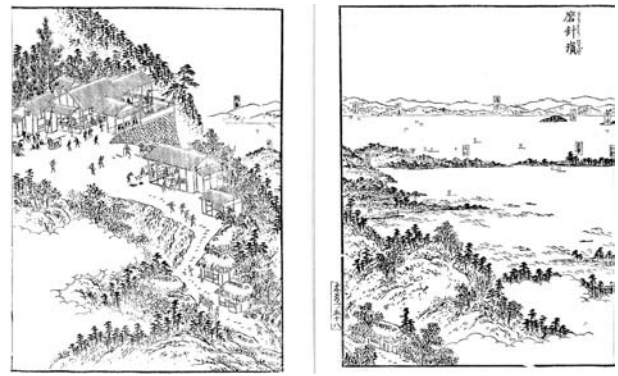


図12 『木曾路名所図会』卷一所収〔磨針嶺〕

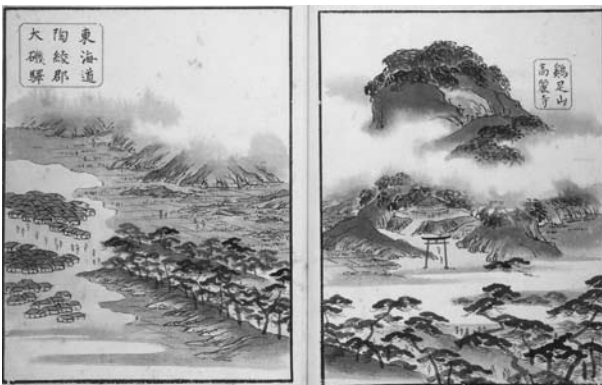


図13 「近海見分図」より〔東海道陶綾郡大磯駅〕

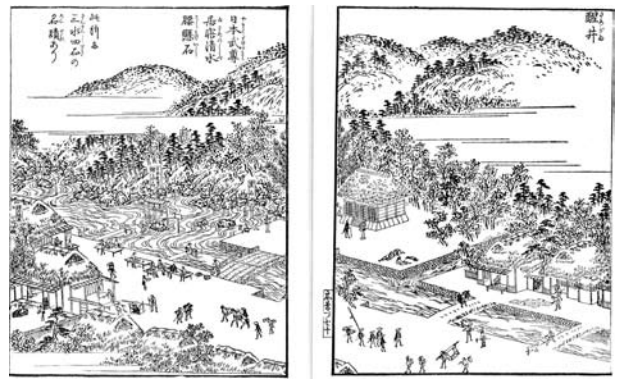


図14 『木曾路名所図会』卷一所収〔醒井〕

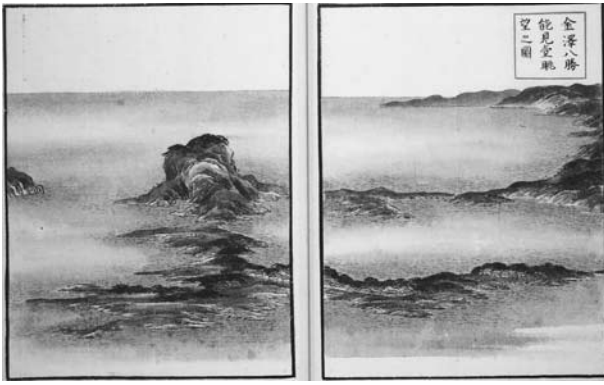


図15 「近海見分図」より「金沢八勝能見堂眺望之図」

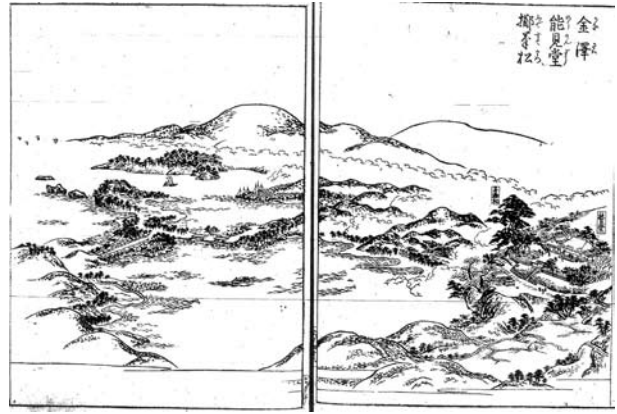


図16 『東海道名所図会』所収「金沢能見堂 擲筆松」

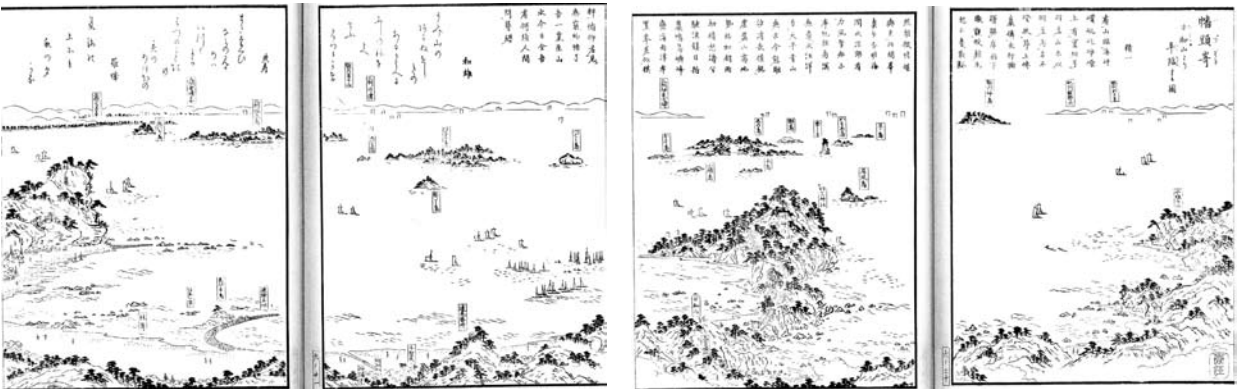


図17 『尾張名所図会』前編卷之六「幡頭寄」(小田切春江画)

	「公余探勝図」	「近海見分図」
寺社	3	7
駅	0	2
滝・川	3	2
街道風景	6	2
陣屋	0	3
山	11	0
島	2	0
港	13	1
浦・浜	31	18
海岸より望む景	4	25
砲台	0	28
その他	4	19

図18 「公余探勝図」と「近海見分図」題材の比較



図19 「公余探勝図」より〔小網代〕

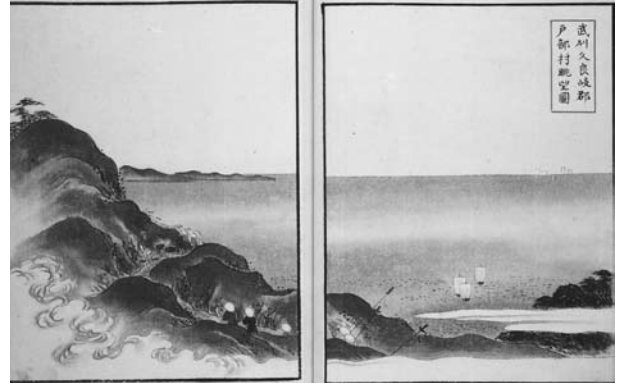


図20 「近海見分図」より〔武州久良岐郡戸部村眺望図〕

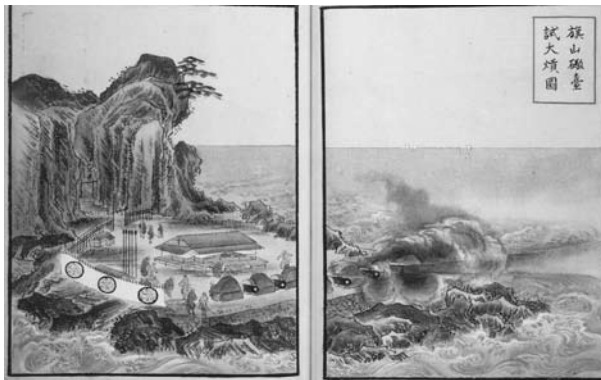


図21 「近海見分図」より〔旗山砲台試大煩図〕



図22 「江戸諸砲台之図絵巻」より〔旗山砲台〕
船橋西図書館蔵



図23 「近海見分図」より〔平砂浦蟹婦漁石決明図〕

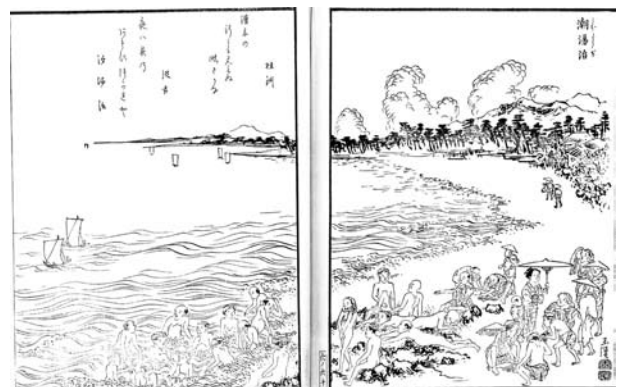


図24 『尾張名所図会』より〔潮湯治〕

On *Kinkai Miwake-no-zu*

a connection between the depiction of the scenery and the coastal defense
in the last years of Edo period

TSURUOKA Akemi

abstract

Kinkai Miwake-no-zu is a picture album including 107 landscape paintings whose scenery was taken during the coastal inspection executed in 1850. The inspection was made to increase the coastal defense of Edo, the city where the castle of Shogun was built, confronted by the emergence of foreign ships demanding the open of the country.

Although it is unfortunate that there is no information about either the artist who made the album or the process through which it was produced, the sign attached to spear appearing most in the album indicates that it was produced under Yasunori TSUTSUI, one of the participates of the inspection.

Kinkai Miwake-no-zu shows an influence of *Yamato-e* style. It shows a contrast with the fact that *Koyo Tansho-zu*, the forerunner of the picture albums of actual scenery strongly shows the influence of Chinese style., The depiction which influence *Kinkai Miwake-no-zu* the most is that of the illustrations of *Meisyo zu-e*, a travel guide which had been popular since the middle of Edo period.

It is possible to point out that *Kinkai Miwake-no-zu* clearly demonstrates the depiction of sceneries viewing the sea from the land. Although such depiction has no practical use, it is thought to be planned to represent the caution to the emergence of the forign ships.

Keywords : pictures in the late Edo period, the depictions of the actual scenery, *Kinkai Miwake-no-zu*, the coastal defense in the last years of Edo, *Meisyo zu-e*